

環境市民講座

「100年の森をめざして一相模川の河畔林から樹木の再生を考える」報告

日時：2014年8月10日（日）13：30～16：30

場所：茅ヶ崎市役所分庁舎6階 コミュニティホール

参加者：市民25名、関係者7名、景観みどり課3名、環境政策課4名 計39名

台風がやってくるという日だったにも関わらず、多くの方が足を運んでくださいました。はじめに、エコワークの青木洋子会長、環境政策課の後藤課長にあいさつをいただき、早速藤原先生のお話に移りました。

藤原先生は、100年の森ではすぐ経ってしまう、自然環境は1000年の森をめざして行きましょうと話を始めてくださいました。

事前に現地調査をしてくださったので、その時に撮った写真を使い、生物多様性と樹木の保全について、具体的な保全方法について提案がたくさんありました。

特に移植した樹木が一本ずつ並んでいる状況は、水害に対しても津波に対しても役に立たないばかりでなく、光が届くので、ツルが絡みつき、周辺には外来植物が絶え間なく生えてくる事になり、森にはならない。周辺の外来植物を駆除し、小さな樹木を植え、その保全管理をすることによって、お互いに成長し、暗くなることによって、ツルも外来種も生えてこないようにしていくことが必要である。

自然の森は管理する必要がないが人間が作った森は管理する必要があるが、どこまで管理するかは、考えなければならない。攪乱は避ける必要があるが、相模川の河畔林は土手の造成で攪乱され、湿った所にタコノアシが生えてきている。ここは



湿った所の指標種であるヨシも生えていたので、地下水の水位が高いのだと思う。その他にオトギリソウやトモエソウ等の希少種が生えてきている。これは管理のたまものだと思う。土手にはウマノスズクサも生えており、森の潜在植生であるタブノキもたくさん生えている。周辺の出来る範囲の管理をしながら、自然の森に返していく事が必要である。

河川の森は水害や津波を防ぐために重要であり、今樹林がない場所はそこから水が入って来てしまう。続けて森ができるようになったら良い。

また、見ていただいた行谷の森については、照葉樹林は暗い森になっているので手を付けないで良いが、スギなどが混在している西側の森はタケ類が入っているので、タケ類の管理が必要である。タケ類は浸食しないようにすることと生えて来た時はすぐに取ってしまう事が必要である。赤羽根の斜面林については、根が重要であり、カシ類は直根で6mくらいになるので、大丈夫であるが、スダジイは浅根であり、崩れてきてしまうので、手立てが必要

である。



次の課題は、雑木林をどう使うかである。雑木林は人間にとって生態系が多様に見えるが、全て管理するのは難しいのでどこまでを管理し、雑木林の生態系を保全するか、考える必要がある。

森の機能についても根があり生きていることにより、複合の機能体として、微気象の緩和、大気浄化、災害防止、O₂の供給、防塵、水の浄化、輻射熱の緩和、消毒作用（森林浴）、環境指標、鳥獣保護、水源涵養林、魚付保安林、リビングフィルターなどがあると示して下さい、温度は特に森があると横浜国立大学の事例では3℃、土の中では6℃違うと話して下さいました。

最後に何を目的に生物多様性を考えるかであるとし、

- ①コアとなる命を守る森を、守り再生する。
- ②コアの周辺部を管理する。それで生物多様性が生まれる。
- ③雑木林の将来を考えた管理をする。自然林に戻す場所と生物多様性を再生・維持する場所が重要。
- ④計画を立てて、管理を行なう。下草刈り、植樹など。
- ⑤土地所有者と価値観を共有する。
- ⑥行政とみんなで行動する。

が必要であると締めくくって下さいました。

その後、休憩をはさんで、活発な質問や意見交換を行い、充実した環境市民講座となりました。

出席された方々の中では、後日わざわざ感想を送ってくださった方もおり、自然環境の保全管理の難しさが分かったが、今後の考える基本にしたい、数年後の相模川の河畔林がまた変化する頃に講座をしてほしいなどのご意見をいただきました。

茅ヶ崎にいられることが少なく、1週間後にはまた海外と言う藤原先生ですが、世界各国を精力的に回られながらも、また来ていただきたいと考えております。

以上

（茅ヶ崎の自然環境を考える会）

《当日の藤原先生のレジメ》

茅ヶ崎市の1000年の森を目指して一相模川河畔林から考える (2014年8月10日)

藤原 一繪 (理学博士)
横浜国立大学名誉教授・
横浜市立大学大学院特任教授

相模川河畔林が、一部防潮堤に置き換えられてから5年を経た。その後の河畔林をみながら、茅ヶ崎の'命を守る緑'について再度考えていただきたい。

1. 相模川河畔の現在

相模川の河畔林は、防潮堤により縮小されてから、相模川の河畔林を育てる会を中心に、市民の手で管理が続けられ、現在に至っている。ササ刈り、雑草刈り、外来植物排除など、気が遠くなる活動のおかげで、トモエソウやオトギリソウなど、近年希少になった植物が生育するようになった。また、主要樹種のタブノキは元気をとりもどし、森林主要部を構成している。しかし移植された大木は、莫大な費用がかけられたにもかかわらず、枯死木が増加した。

2. 森の機能

森は、本来総合的機能を持っている。大きく3つの機能にまとめられる。第1の精神的機能、かつては、一里塚のように目印やランドマークの役割を果たしてきたが、現在は、その多くを鳥類に預け、市街地では、景観木のように、楽しむものになり、森としての機能は少ない。移植された大木はこの類にはいる。第2の物理的機能は、木材や材料、防風、防潮、防雪など、材としての機能があげられる。第3の生物的機能が、人間や、他の生物にとり、重要になる。いきていることで、酸素補給、炭酸ガス定着、災害防止など、命を守る機能である。

3 森の形態と管理の有無

茅ヶ崎市では自然林、雑木林、植林地など、さまざまな形態の森林がある。人間は自然を制覇したい欲望で、管理をしたくなるが、自然林において管理を行う必要がない。植林地は、人間が財を求めることから、集材するまで管理が必要である。雑木林は、本来は放置されれば自然林にもどるはずであるが、都市域ではもどれなくなっている。自然に戻すためにも、また生物多様性を維持するためにも管理が必要となる。

4. 生物多様性

生物多様性は、自然種も、パイオニア種も、草原種も、さまざまな種群がかかわりあったところが高い。植物と動物、昆虫他の生物のかかわり合いから生まれる。

5. 命を守る緑

では、私たちの命を守る森はどのような森の形態が必要であろうか？ おのずから、安定した自然林が重要になる。自然林の周辺に生物多様性を擁する雑木林、草原などがあれば、命と生物多様性を併せ持つ緑地域になる。自然林は管理なしで、1000年から1万年、次の氷河期まで持続する。人が1度壊した自然はなかなかもとにもどらない。もどすためにも、また生物多様性を維持するためにも、人の管理が必要である。どこをどのようにするか、これは、行政と市民が、ともに勉強し、命と生物多様性を維持する環境を持続することが、重要な課題である。